英語教育の充実に向けて【CAN-DOリスト ver.】

英語教育における授業改善に向けて、CAN-DOリストの形式による学習到達目標の設定等についてまとめました。授業づくりの参考のために、御確認ください。

空知教育局義務教育指導班・高等学校教育指導班

CAN-DOリストとは

学習指導要領に基づき、各中・高等学校等が生徒に求められる英語力を達成するための目標（学習到達目標）を「言語を用いて何ができるか」という観点から設定するものです。

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（H28）における記載

○　各学校においては、国が学習指導要領に定める領域別の目標を踏まえ、学校ごとに具体的な学習到達目標を設定することが求められる

学習指導要領（H29）における記載

○　学年ごとの目標を、学習指導要領を踏まえて各学校が設定する「学習到達目標」として生徒に求められる英語力を達成するための具体的な形で設定する取組

○　今回の改訂で領域別の目標が明確に示されたことにより、その目標と関連付けられた学習到達目標とする必要がある

CAN-DOリストの設定の手順

1　生徒の学習状況や地域の実態等を踏まえた上で、卒業時の学習到達目標を「～することができる」という形で設定します。

Point１　学習指導要領の教科（高等学校は科目）の目標に基づいたものとします。

Point２　卒業までに生徒が身に付ける能力の全体像を描くようにします。

Point３　入学で迎える児童生徒の実態を把握しておきます。

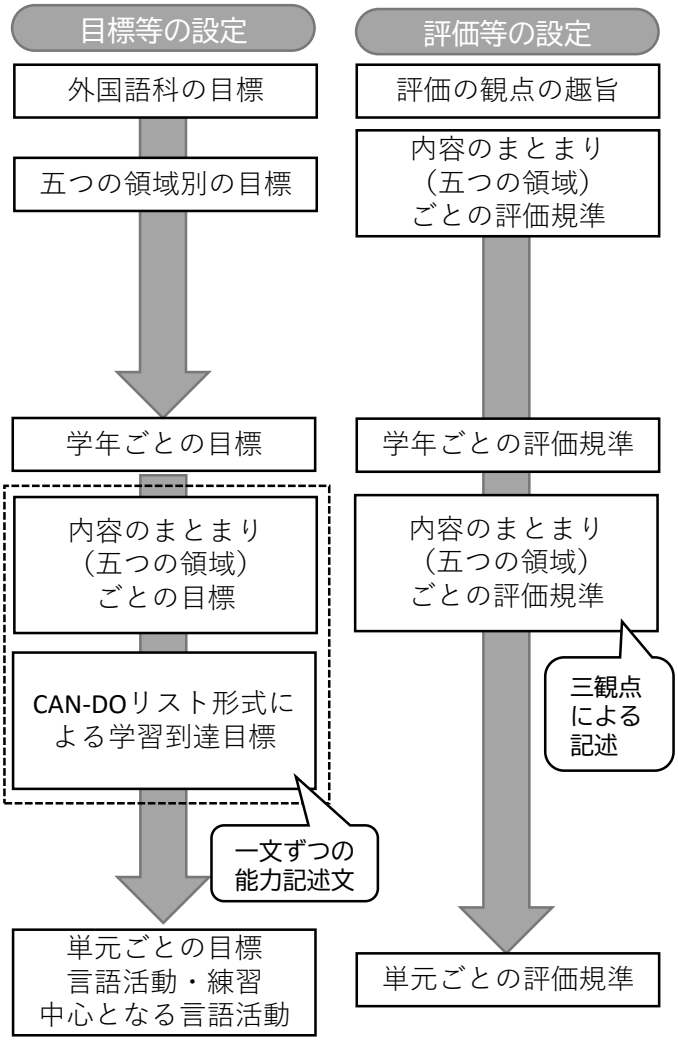
2　卒業時の学習到達目標を達成するため、各学年段階における指導や評価に役立てるよう、学年ごとの目標として、五領域を用いて「～することができる」という形で設定することが望ましいとされています。

3　CAN-DOリスト形式による学習到達目標は、五領域を用いて何ができるようになるかを具体的な能力記述文によって表します。

Point１　能力記述文の書き方や難易度の配置は、CEFRやCEFRを踏まえた国内の取組、外部検定試験の実施団体や教科書発行者が作成した「CAN-DOリスト」を参照できます。

Point２　学校や生徒の実態に応じた分かりやすいものを作成し、指導や評価に活用する中で、適時見直します。

Point３　生徒や保護者との共有を目指します。



参考：令和３年度中学校教育課程編成の手引（北海道教育委員会）

※　CAN-DOリスト設定の際は、外国語担当教員等全員が参加し、管理職の理解や協力、リーダーシップのもと、言語を用いて何ができるようになることを目指すかという観点から、生徒の実態を踏まえた上で、育成したい資質・能力や生徒像、学習指導要領に基づいた指導と評価の方法を共有する体制を構築するようにします。

CAN-DOリストについて見直してみませんか？

CAN-DOリストの活用と評価

1　年間の指導と評価の計画への反映

・CAN-DOリスト形式の目標を年間指導計画にどのように位置付け、どのような指導を行うか、また、設定した目標の達成度をどのように把握し、評価するかについて計画します。
・観点別学習状況の評価における外国語科の評価の観点は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」であり、内容のまとまりごとに評価規準が設定されているため、各観点でCAN-DOリスト形式の目標を設定します。
・生徒や保護者と学習到達目標を共有することが望ましいとされています。
【Ｒ４　学習到達目標を公表している学校の割合：中学校100％】

2　単元の指導計画への反映

・各学校で実際に行われる学習活動を基に各単元の目標及び評価規準を設定し、これらを意識して授業を実施することが重要です。
・教科書を中心に、単元の目標を達成するのに適した教材を活用した各時の学習指導を計画するようにします。
・目標の達成状況を把握するための具体的な評価を計画し、単元計画に位置付けるようにします。

3　評価方法及び評価時期

・観点別学習状況の評価において、学習到達目標に対応した学習活動の特質等に応じて、筆記テストのみならず、面接、エッセイ、スピーチ等のパフォーマンス評価、活動の観察等、様々な評価方法の中からその場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択することが重要です。
・生徒の学習の実現状況を記録するための評価を行う際には、単元等のある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において評価することが求められます。さらに、学期や学年といった単位で学習の実現状況を総括します。

4　達成状況の把握及び設定した学習到達目標の見直し

・外国語科担当教員等が全員で各単元の目標や学年ごとの学習到達目標の達成状況を把握し、必要に応じて指導方法を改善する必要があります。また、評価の妥当性及び信頼性を高める視点から、評価の方法を適宜見直します。
・設定した目標が適切なものであったかどうかを検討し、必要に応じて、目標の内容や難易度を見直すといったＰＤＣＡサイクルを確立するようにします。

CAN-DOリストの設定により期待される効果

○　生徒にどのような英語力が身に付くか、英語を用いて何ができるようになるのか、あらかじめ明らかにすることができ、そうした情報を生徒や保護者と共有することで授業のねらいが明確になるとともに、生徒への適切な指導を行うことができます。
○　「知識及び技能」の習得にとどまらず、それを活用してコミュニケーションが図れるよう、五つの領域にわたる総合的な資質・能力の育成を重視することが期待されます。
○　校内でも教師によって指導方法が大きく異なることがある中で、教師間で指導に当たっての共通理解を図り、均質的な指導を行うことができます。
○　面接・スピーチ・エッセイ等のパフォーマンス評価などにより、「言語を用いて何ができるか」という観点から評価がなされることが期待され、更なる指導と評価の一体化とその改善につなげることができます。

【参考】「Hokkaido CAN-DOリスト」
本道の先生が学校間の接続を意識した上で、内容ごとのまとまりで作成しています。
令和２年７月　北海道教育委員会

【参考】「Can-Doリスト形式の学習到達目標作成とその活用」
小学校の事例を元に動画で理解を深めることができます。
(「mextchannnel」へリンクします)
令和４年７月　文部科学省

【参考】「各中・高等学校の学校における『CAN-DOリスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」
Q&Aあります。
平成25年３月　文部科学省

※　単元構成の留意点等については、資料「英語教育の授業改善に向けて【授業改善ver.】」（令和５年８月３日付け事務連絡）を御確認ください。

※　QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です